

第2回青森県生涯学習審議会会議録

日時	平成29年2月20日(月) 14:00~16:00
場所	ウェディングプラザ アラスカ 地下1階「サファイヤ」
出席者	<p>《 委員 》 敬称略 13名 (欠席4名)</p> <p>上澤 司 奈良 陽子 岡 詩子 菊地 倫子 白戸 美也子 出崎 真里 柏谷 至 松本 大 増田 由美子 春藤 千秋 工藤 清子 (天内 不二子 奥島 涼子 長岡 俊成 住吉 治彦)</p> <p>《青森県教育次長》 三上 盛一</p> <p>《 事務局 》 5名</p> <p>児玉 政光 (生涯学習課長) 渡部 靖之 (学校地域連携推進監) 森田 勝博 (企画振興グループマネージャー) 他2名</p> <p>《 その他 》 2名</p> <p>仁和 由紀人 (学校教育課 課長代理) 小森 直樹 (総合学校教育センター 教育活動支援課長)</p>
内容	<p>1 開 会</p> <p>2 教育長挨拶</p> <p>3 案 件</p> <p>(1) 第1回審議会における意見の整理について</p> <p>(2) 若者を対象とした事業・取組について</p> <p>(3) テーマについての意見交換</p> <p>(4) 先進事例実地調査先について</p> <p>4 その他</p> <p>5 閉 会</p>
配付資料	<p>次第</p> <p>青森県生涯学習審議会委員名簿</p> <p>座席図</p> <p>資料1 第1回審議会における意見の整理</p> <p>資料2-1 若者を対象とした事業・取組について (県)</p> <p>資料2-2 県以外の若者を対象とした事業・取組について</p> <p>資料3 先進事例実地調査について</p> <p>資料4 今後の予定について</p>
	<p><参考資料></p> <p>参考資料1 「若者の学習・生活体験と県内定住に関する県民の意識調査」について</p> <p>参考資料2 青森県の子ども・若者の現状と課題 (青少年の意識に関する調査より)</p>

(◆会長 ◇委員 ○事務局)

案件（１）第１回審議会における意見の整理について

◆会長

それでは、案件の１に入っていきたい。事務局から説明をお願いします。

◇事務局

資料１について。前回審議会において、審議テーマを「あおもりで若者が集い、生き生きと活躍できる持続可能な地域社会づくり」と決定いただいた。若者の実態と課題ということで、「自己肯定感や自己有用感が低く、将来に対し夢や希望を持ってない若者が多い。」一方で、「夢や希望を抱いている若者は、自分のやるべきことを理解して、主体的に取り組んでいる。」等の意見をいただいた。

また、若者を取り巻く環境について、「人間関係が希薄化している。」ことが大きな影響を及ぼしているということで、委員の意見が一致したように思われる。この状況については、高校を卒業する前の若者と高校を卒業した後の若者たちにどのような支援ができるかに整理できると考えている。特に、高校を卒業した若者が青森に集い、生き生きと活躍できる地域社会をつくっていくために、その裾野を広げる学びと、その学びを生かす場を作っていくことが重要であるとまとめていただいた。

◆会長

若者をめぐる現状としてどのようなことが課題だと感じているか意見ををお願いしたい。

◇委員

私の居住地域では、高校卒業した後にその上の専門学校も大学もない。もっと学びたいと思っても進路先がない。また、地元企業が少ないので就職することができない。必ずは一旦出ることになる。何か目的があって戻ってくる若者もいるが、なかなか戻って来られない。高齢化で地域の人口が減っているという現状で、持続可能な地域社会づくりは、すごく難しいと感じる。実際、若者を対象とした事業をやっているが、自分はどうやって関わっていけばいいのか、今自分はどのような立場で地域にいるのか、すごく悩んでいる人が多いと感じた。その辺を何とかつなげたい。

案件（２）若者を対象とした事業・取組について

◆会長

前回の議論の時にも、高校生までの取り組みは比較的充実してきたのに対して、高校を卒業するとそれが切れてしまうと、多くの委員から指摘があった。そのことを中心に議論していかなければならない。次に、案件２について説明をお願いしたい。

○事務局

資料２の１について。まず、若者同士のネットワークづくりを目的とした「若者社会参加促進事業」がある。平成２７年度から社会とのつながりを求めている若者の自立支援に向けたキャンプを実施するとともに社会教育施設を拠点に若者と地域、若者同士の出会いとつながりを形成する２つの取組を行っている。

次に、「地域のつながり創造人育成事業」は、地域の再生創出を支える人財を育成することを目的として、地域の若者を対象とした想いをつなぐ語り場キャラバンや地域住

民を含めた住民会議を開催し、若者の想いや地域課題を語り合い、これを解決する取組により地域の若者を育成するノウハウを理解し、地域をけん引する人財を育成するという取組である。

次に、若者の企画力と実践力を養う「パワフル AOMORI!創造塾」は、新たな地域づくりの活動者の発掘と育成、仲間づくりの促進やネットワークの形成・強化、地域活動の活性化を図り、地域コミュニティをけん引する人財を育成することを目的としている。

次に、高校生の社会参加を促す「高校生スキルアップ推進事業」は、高校生の知識の幅を広げるとともに、社会の変化に柔軟に対応して逞しく生きるための様々なスキルの向上を図ることを目的として学校外における学習への積極的な取組を推進する事業である。

次に、リーダー性を養う「未来の青森を担う若人育成講座」は、第1講座から第7講座までが用意され、どのように地域活動に取組んでいけばいいかのノウハウを学ぶことができる。

最後は、高校生の主体性を養うことと大学生の人間関係スキルを向上させる「高大連携キャリアサポート推進事業」は、高校生のやる気や意欲を引き出し、自らの夢に向かって主体的に行動できる人財を育成するため、大学生が運営するワークショップを体験するとともに、コミュニケーション・ファシリテーションの大学生のスキルアップを図ることを目的としている。

次に、首長部局で行っている事業として中・高生の社会参加を促す「地域ではぐくむ交流体験創出事業」は、環境生活部青少年・男女共同参画課が主管し、青少年の健全育成に効果的な体験活動を実施することにより、子供たちに地域社会の様々な世代や団体との触れ合いや共同作業を通じて、他者との連帯感や生きる力の基礎となる自己肯定感を育むとともに、地域資源を活用したモデル事例として地域における取組の普及と定着を図ることを目的としている。

二つ目は中学生の自主性を養う「未来ひらめき想像塾」は、企画政策部地域活力振興課が主管し、中学校2年生と3年生を対象に、共同生活を通して広い視野を持つ子どもたちを育成するため、想像力と愛着心を養うことを目的とした塾を開催している。以上が若者を対象とした県の取組である。

◆会長

資料2の2も続けて説明をお願いします。

○事務局

資料2の2について、若者を対象とした県以外の取組を紹介する。まずは、「A-Paradise」は、青森市教育委員会が主催で青森市内と近隣の若年層を対象とした取組で、アートで音楽のあるイベントなど若者のアイディアを生かし、多様な取組が行われている。

二つ目の「9根」は東北町を中心として活動し、若者が楽しめるイベントとして「清水目音夜祭」を年1回開催している。

三つ目の「SEEDS NETWORK」は、乳幼児期の母親達が楽しめるイベントを企画している。

四つ目の「NPO 法人横町十文字街育て会」は、黒石市横町十文字エリアに、あずましくほっとくつろげる場をつくるというコンセプトで、平成24年から同じ思いを持つ若者が集まって組織され、活動している。

五つ目の「SHIMOKITA HOPE FARMERS PROJECT」は、青森県下北地域の耕作放棄地を再

利用して、一次産業を通じて地域の街おこしを行っている。むつ市の商店街の比較的若い人たちが団体を組織して活動している。

六つ目は、県の取組の中でご紹介した「若者社会参加促進事業の若者拠点づくり支援」を契機に発足した「いいなかどまり会」である。中泊町を自分たちで盛り上げていきたいという想いで平成 27 年 11 月に結成され、いろいろなイベントに運営スタッフとして参画して意欲的に活動している。

次に紹介するのは県外の取組事例である。まず、一つ目の「若者が活躍する地域づくりプロジェクト」は、若者が地域において課題を発見し、その課題を解決するための活動を支援するという岩手県の取組である。

二つ目の「NPO 法人 W i z」は、岩手で自己実現を目指してチャレンジする若者に対し、若者主体の新たな出会い、ネットワークの創出、コーディネートによって岩手に関わる選択肢を提供するという取組を行っている。

三つ目の「NPO 法人 ETIC」は、起業したい若者達を対象として、リーダーの事業に参画してもらい、事業プランを自ら考えてもらう「東北ベンチャーズ」や大学生を対象にまちづくりや地域課題解決の最前線で、約半年間インターンシップを体験してもらう「地域未来創造型インターンシップ」、被災地で復興活動に取り組むリーダーを、短期・中期・長期の三つに分けて育成する「震災復興リーダー支援プロジェクト」等を行っている。

最後に「NPO 法人 あおもり若者プロジェクト クリエイト」では、“地域を舞台にした教育こそが社会を変える”をモットーに、商店街の協力を得ながら高校生が様々な活動に参加する機会を創り、高校生が主体となって喫茶店の経営をしたり、中心商店街を活性化させるために高校生に企画させ、提案してもらったりという活動を支援する取組をしている。

◆会長

これが若者を対象とした青森県内外の取組の全てということではない。前回の審議会でも話題になったように、ある程度活動しよう、またはしたいと思っている若者を積極的にどう支援していくのかと、今直接は関わりを持っていない若者に対しての取組はどうか、若者のネットワークづくりと企画力・実践力を養う事業などの色分けをして紹介いただいた。

◇委員

私の町では、昨日「わけもの意見交換会」が開催された。若手が 22 人ほどいるが、若者だけの意見交換は話しやすいという意見が多かった。役場の職員も若い人たちと一緒に方向性を見出すことができたと言っていた。若者と触れ合い、みんなの声を聴いて、自分も話すことがとても力になると感じた。これから継続していけると期待している。

◆会長

若者が 22 名ということだが、どのような若者たちなのか教えていただきたい。

◇委員

町役場の若手が 22 名いる。その若者たちが 4 チームに分かれて、街の活性化について意見交換を行った。

◆会長

地方に定住する若者がまとまった数いる職場として、市町村の役場がある。そういう意味では一つの切り口となるのではないか。

◇委員

一番に紹介された「A-Paradise」に関わった若者と、先日話す機会があった。その若者が話したことを伝えたい。青森では、音楽、演劇や物づくりなど、10代後半から20代の若者たちが活発に活動している状況が見られる。今まで分野を越えて、交流することはあまりなかったようであるが、このようなイベントを通して、音楽活動をしてきた人が演劇に興味をもつなど、横の繋がりができたようである。また、その若者は、引きこもったり、自ら命を絶ったりする同年代の若者がいるけれど、置かれている環境はいつか変わっていくから、そこだけで人生を決めつけなくてほしいし、モヤモヤしていたり悩んでいたら、自分もそういうことがあるよと声をかけられたらいいなと話してくれた。活動的な若者たちがいる一方で、引きこもっている若者たちも少なくないと思う。そのような若者たちが外に繰り出せるような、自分もこんなことをやってみたいと思えるような居心地がよいなあと思えるような場が作れば良いと思っている。

◆会長

社会参加できない若者たちにどう手を差し伸べていけばいいのかはとても重要なテーマではないかと思う。そのような活動にも注目していきたい。

◇委員

「地域のつながり創造人育成事業」に実践だけ参加した。実践で“キャンドルナイト”をさせてもらったが、イベントで使うキャンドルを子どもたちや一般の参加者を募って、公民館講座として一緒に創るというつながりができたり、つるた街プロジェクトのメンバーとこれまで一緒に参加したことがなかった人とのつながりが作れたりしたので、とてもいい事業だと思っていた。高校の時から社会人になるまでこのような取組があるということを全く知らなかったのだから、素敵だと感じながらやらせてもらっていたし、そういうつながりができてすごくよかったと思っている。

◇委員

県の事業で「高校生スキルアッププログラム推進事業」が紹介されたが、盲学校では公開講座を毎年開催していて、そこに半分は高校生、もう半分は一般の方が参加している。参加した高校生に感想を聞くと、日々の生活を見直すいい機会になると言ってもらっている。このような機会は、自分でこういうことができるようになったと自信にもなるし、主体的に日常の生活を営んでいくような気持ちにもつながると感じている。参考資料2の中にもあるが、やはり自己肯定感の低い子どもが多いという実態を考えると、どうしても低学力の子どもに自信を持ちなさいと声をかけても、自分で学力が低いということに気づいているので、なかなか上手いいかないことが多いのだが、このような様々な取組の中で自分に自信をつけていく、教科指導だけではなく、学校でも授業や行事を通して工夫していかなければいけないと感じている。

◆会長

関連して確認しておきたいのだが、「高校生スキルアッププログラム」で、認定証を交付された生徒は、その後、何かステップアップの機会があるのか。本大学にも公開講

座を開催すると結構な数の高校生が参加するのだが、そのような高校生が、もっと自分たちで発信する側に回るなどといった展開というのはあるのか。

○事務局

残念ながら認定証を交付された生徒が、その後どのように活動しているのか把握していない。ただ、このプログラムに参加した高校生は、コミュニケーション能力が向上し、自己PRがとても上手になっていると担当の教師から伺っている。

◆会長

休憩後、ここで紹介された取組の評価および紹介されたもの以外の取組に関して、本格的に意見交換していきたい。

(休憩)

案件（3）テーマについての意見交換

◆会長

案件3ということで、テーマについての意見交換をしていきたい。若干整理すると、1回目に出された若者を取り巻く現状や課題を踏まえた上で、今までどのような取組が県内外で行われてきたのか、その現状なり課題なりについて認識を共有していきたい。生涯学習課の取組をどう評価していくのかも大きな論点になるだろう。また、ここで紹介された以外にどのような取組が県内にあって、どこに注目すればいいのか、更に、今までの取組で十分に手当てできていない課題が何か、どのような領域に見落とししている可能性があるのかも議論できればいいと思っている。

◇委員

最初に質問をしたい。政策的に重要なのは、どういうプロセスで若者を支援してきたのかだと思う。つまり、経済的に支援する、補助金を出すこと以外に様々な若者の学びや育ちを支援してきたところが県としてあると思う。経済的な部分だけではなく、参加者の学びや成長を支援してきたところがあると思う。そういうところで、県としての支援を説明してくれば、こういう方向で考えていけばいいということが見えてくると思う。それから、今日紹介したのは、参加する若者が自由に企画して、自由に実践するのがメインという印象を受けた。それだと、うまくいくところはいいが、単発になりやすく持続に結びつかないことが多く、地域全体に広がっていきにくい。自由に企画して実践させるだけではなく、地域住民との交流や多世代との交流があってもいいと思う。持続していくためにはそれぞれの地域で根付いていく必要があり、その地域の文化や地域の暮らしを若者が主体となって受け継いでいくことが必要ではないか。今回のテーマ「あおもりで集い、生き生きと活躍できる持続可能な地域社会づくり」という意味で言うと、定住とか移住にも目を向ける必要がある。そのためには県内在住の若者たちと県外の若者の交流にも目を向けるとか、あるいは産業とか子育て支援にも若者が関わってくると思う。

◆会長

三つほど論点を出していただいた。一つ目は支援の仕方についての質問だった。経済的支援、何かのスキルを身につけてもらうための支援、活動の場提供など考えられるが、どういった支援がなされているのか。これ関し事務局で回答できるか。

○事務局

まず、二つあると思われる。一つは事業として委託とか補助という形で活動そのものを支援することと、もう一つは直接的な支援というよりも人を育てる支援がある。県の講座に参加した方が新たな活動を始める団体を立ち上げるといった例は多くある。

◆会長

あと二つの論点に関しては全体で議論した方がいいように思う。二つ目の問題提起は、企画の自主性と効果とのバランスについてである。自主的に企画を自由につくるのは、いい面と悪い面があり、確かに若者の創意工夫が十全に発揮できると一方で上手くいかなかったり、単発で終わってしまったり、あるいは地域の中での広がりや持続性が生まれなかったりすることもある。両者のバランスをどのようにとっていけばいいのか。

◇委員

若者が地域で活躍するといったときに、頑張っ活動できる若者はいいが、なかなかそういう若者ばかりではなく、どうすればいいのかわからない、住まざるを得ない、ここで一生頑張るしかないという若者もたくさんいる中で、自分たちだけではなく、いろいろな世代と一生懸命やり取りしながらやっていくしかないというの踏まえて若者が輝く地域社会づくりなのではないかと思う。若者だけをターゲットにするということではなくて、若者以外も含めた事業があってもいいのではないかと思う。

◆会長

若者を受け入れる側の社会に対する働きかけがあってもいいという意見だと思う。これとも関連するが、三つ目の論点は、移住・定住や産業、子育てなどテーマを絞ることで、より実践的な支援ができる可能性があるという提案だった。この辺りも議論していただきたい。

◇委員

高校生を対象にリーダー性を養う事業とか様々取組まれているが、世の中にはこのような優等生の高校生がこんなにもたくさんいるのかと焦った。自分の高校時代は、このようなことに興味を持ったことも考えてみたこともない。やはりこういうことに参加したいと思う高校生は、すでにいろいろなことにアンテナを張っているのだと思う。半分以上の高校生は、このような事業に全く関心がないし、参加するような性格ではないと思っている。大学に進学したい、専門学校に進学したい、何とか親の負担を減らそうとアルバイトをしている高校生もたくさんいる。部活動に忙しく、アルバイトの時間がないという高校生もたくさんいる。アルバイトでは、地元の付き合いであったり、つながりだったり、年代の違う人と会話をしたり、実践を通してコミュニケーション能力がどんどん高められていっている。なので、私が思うのは官民一体となって、アルバイトを採用している企業に対し、高校生や大学生の人育てというものを提案していくことが必要なのではないかと思う。アルバイトをしている中で、私の地元にはこのような企業がある、自分を生かせる場がある、私は地元にいることができる、ここで自分を生かすことができるという考え方に変わっていくのではないかと思う。また、地元にはこういう企業があるとか、こういう仕事をしていけばステップアップしていけるということを教えていく。部活が忙しい高校生には、部活の時間をちょっと使って、奉仕活動の勉強をさせるなど、周りでサポートする大人が必要であると思う。

◆会長

繰り返し議論されてきた重要な論点である。積極的に活動に参加する人たちや自分たちで事を起こす人たちを伸ばしていただくことが大事なのだが、その一方で、そのような機会がなく、参加できない人たちに向けた取組も注目していかなければならない。官民一体となってアルバイト先で人材育成ができないかという提案であるが、なかなかおもしろいアイデアではないか。確か子育てをサポートする企業や社員を表彰し、認定する制度が国にあったと記憶している。若者の育成に力を入れる企業を認定するというイメージではないか。先ほどの、受け入れる側の体制整備にもつながる提案である。

◇委員

私がいる市では、本当に若者が少なく高齢者が多い。それでも、若者が集まって地域を何とかしようとして街づくり協議会とか、地域活性化委員会とか名称をつけてワークショップが行われていた。そのワークショップに参加したときに、地域は私たち若者に何を必要としているのかを逆に知りたいという意見が出た。また、自分達が企画して楽しいと思うイベントをやってみるけど、単発で終わってしまう。自分達が楽しかった、良かったでは、次につながらないという意見も出た。若者が地域に溶け込んで何をやっていこうかと思ったときに、地域は若い者の何を必要としているのかを考えさせられた。そこに注目したら、やはりテーマにある「生き生きと活躍できる」ことが必要とされて、頼りにされて、そして、自分の力で何かできたときに、それが自分の自信となり、地域のための力となりというようにつながっていくことではないかと考える。地域社会づくりというのは、若者だけの問題ではないのだろうと思う。では、根底に何をどうすればいいのか考えると、やはり、地域の問題であろうと思う。自分達の街をどうしていくのか、街の将来をどうしていくのかがポイントになってくると思う。

◆会長

自分達の自己満足で終わるのではなく、地域の人は何をしてほしいのか真剣に考える若者は立派だと思う。テーマ性を持たせた方が、地域のみんながこのことで悩んでいるから、若者に考えてほしいというような流れを作りやすい。県の事業に、大学生を対象とした「学生発未来を変える挑戦」という取組がある。県の長期計画に関連した地域課題を解決するために、大学生のグループに調査させて、最終的にコンテスト形式でプレゼンする企画だったと記憶している。大学生に限らず、若者に帰ってきてもらうためにはどうすればいいかアイデアコンテストのような企画でもいいのではないかな。実践を通して、例えば、観光、産業、雇用創出とか、子育て支援というテーマで何かできることをやってもらうなど、ある程度テーマを持たせた方が若者にとって応えやすいと思う。

◇委員

先日講演を聴く機会があり、今の高校生の平均寿命が100歳くらいになるだろうとある大学の先生が話されていた。それを聴いたときに、本当に本審議会のテーマである「あおもりで若者が集い、生き生きと活躍できる持続可能な地域社会づくり」が、切実な問題で真剣に取り組まなければならないと考えさせられた。県でもいろいろな事業をしている。でも、私もそうだが本当に興味がなければ、どこに聞けばいいのか、何をすればいいのか、自分に何ができるのか、何を必要とされているのか分からないと思う。自分が地域にとって社会にとって本当に必要な人間であると自覚するためには、そのようなところに出てこられない人たちをそのような場に巻き込んでいくことが必要だと思う。そのためにも、どこに相談に行けばいいのか、どこに助言を求めればいいのか、簡単に

相談に乗ってくれて、助言をしてくれる場所が必要だと思う。高校生のうちは何とかなると思うのだが、高校から離れていった子どもたち、上の世代の子どもたちをどうするかが課題だと思う。今、地域に残ってほしいと小学校・中学校、高校ではいろいろな取組がなされているが、青森にはこのような仕事がある、青森でこのようなことができるということを教えている。しかし、その前の世代の子どもたちはそのようなことを知らない。経験しないで育っているので、簡単に相談できる窓口があれば、入れない子どもたちも社会に出ていけるのではないかと考えさせられた。いろいろな世代の子どもたちが活躍して、最後まで楽しく生き延びてほしいと思った。

◆会長

感触でいいのだが、地域に関する教育が学校で充実する前の世代は、現在何歳くらいだと思うか。

◇委員

30代のころから後半の世代だと思う。30前後までの子どもは結構学校でいろいろな教育を受けてきているので、30代半ばから40前後ぐらいだと思う。

◆会長

もう一つ、相談できる窓口について話されていた、相談する相手というのは年輩の方なのか、若者同士で相談し合うイメージなのか。

◇委員

そういうのではなく、県庁のなんでも相談できます課みたいなイメージである。今、市でもいじめに対する窓口とか、教育の悩みを相談できる窓口とか、いろいろな窓口が設置されているが、そのような感じで、ここに相談すれば、このようなことに対して答えてくれるイメージである。

◆会長

社会教育では公民館が一つの窓口になっているが。

◇委員

公民館に行って相談するかと言えば、相談しないと思う。フリーダイヤルで相談できるのが理想である。簡単に相談できるシステムみたいのがあればいいのではないかなと思う。

◆会長

むしろ他の地域で、そのような相談窓口の事例があれば、ぜひ情報を収集しておきたい。まだ、発言をいただいていない委員から一言いただきたい。

◇委員

私はアンケート調査のグラフを見て、みんな意識が高く、自己肯定感が高いと思ってしまう。一番驚いたのは、将来就きたい仕事に対して、進学したいと考えている高校生は就きたい仕事があるからと回答し、卒業して就職する高校生はこういう仕事をしたい

からと回答している割合が 7 割近くという結果になっている。ということはあとの 30 パーセントは考え中になると思うが、ちゃんと自分の将来のことを考えているのだなと感心した。自分のことを考えると、絶対考えられなかったと思う。まだ考えていない子どももたくさんいると思うが、なんとなくこういう高校に進みたいと意識している子どもがたくさんいるのは、夢があっていいと思う。調査結果から見ると、みんな青森が好きだし、自分のことを考えているといういい結果なので、今の若者は大丈夫なのかなと結果だけを見ると思ってしまう。

◆会長

参考資料 2 の調査結果の感想をいただいた。この調査については、他の部署でやった調査なので、詳しいことは分からないと思うが、この調査について事務局から補足したいことはあるか。委員からは、かなり自己肯定感が高いし、就職とか愛着とかかなりいい結果ではないかということだが、これは、本当に青森県の子どもの姿を反映しているのかという質問だったと思う。

○事務局

この調査は、2年に1回で対象者は抽出である。ただ、前回の審議会では全国学力状況調査の結果を紹介していたため、今回はこの調査を用意した。経年変化や他の調査との比較をする必要があると考えている。将来就きたい仕事はありますかを単純にそこだけ切り取ると誰もが答えられる。しかし、実際就職しようとしている多くの生徒は悩んでいるのが現状である。やりたいことがあるかという質問と実際にやれるかということは別ではないかと思う。青森県を好きだということについては、実は他の調査でも非常に高い結果となっている。私は高校の教員だったので、一年生から三年生の春まで、進学・就職ほとんどの子が遠くに行きたがらないというのが大きな傾向である。ただ、現実問題として就職する際に別の判断が働いてしまう。そこまでの調査にはなっていないようだ。

本来、今日は参考資料 1 の意識調査では、自己肯定感と自己有用感について他の調査の項目を使用している。集計後、他の調査と比較して、明らかにする予定である。

また、青森県のイメージや県内定住、職業観についてどのような意識を持っているのかを、会長にも調査研究顧問を依頼し、分析を進める予定である。

◆会長

参考 1 の生涯学習課の調査は、より上の年代も含めた調査となっている。私も分析に関わっており、年度末までには結果をまとめる予定となっている。参考資料 2 の弘前大学宮崎教授の分析では、確かに自己肯定感のスコアは結構高いように見えるが、全体としてみると自己肯定感は低いと評価されている。この審議会としても、実は高いので大丈夫と言い切ることは難しいと思われる。むしろ、子どもたちの本音として、自信を持って物事に当たっているとは言いがたいし、学校を卒業後、就職活動や仕事の場面での挫折感が、子どもたちの自信を失わせてしまうこともあると思う。この審議会としてのトーンは大きく変えずにいきたい。

◇委員

私がいつも考えていることだが、自分が小さいときは、将来のこととか夢とか地域のこととかは親から教えてもらった。今の 20 代から 30 代の若者は親に相談しないで、友達に相談しているようだ。友達に相談しても結果がなかなか出ず、次のステップにいけ

ないようだ。相談相手は、上司だったり、周りの大人だったり、いろいろな人たちを知り、その人たちを信頼することによって、相談することができると思う。周りの大人達が若者に目を向けて、いろいろなことを相談してもらえような関係をつくっていかねばならないと普段感じている。自己肯定感が高くなれば、県の事業にも参加するし、地域のことも考えることができるようになる。しかし、なかなかそこまでいかない子どもたちの方が多いと思う。そういうときに周りの大人達が手を引っ張ってあげるとか、このような世界やこのような考え方もあるよと教えてあげてあげて、いろいろな方面から子どもたちに対して助言できる支援体制をつくっていくべきだと思う。今の子どもたちは精神的な面がすごく弱いと感じる。そこをサポートしていくのが周りの大人の役割なのではないかと思う。

◆会長

何人かの委員が指摘されていたことだが、直接若者をターゲットにしたような活動以外に、それを受け入れる側、職場だったり、部活動だったり、あるいは、親自身というところに対するアプローチも必要なのではないかと考える。特に、この審議会として活動を積極的にするのは子どもに対してどうアプローチしていくのかを考える場合には、受け入れる側へのアプローチは重要な論点だと考える。

◇委員

皆さんの話を聞いていて、ハイハイと言って参加できる子とそうではない子がいるが、やはり実体験が大事だと思っていて、体験したことが自信につながると考えている。では、体験させるためにはどうすればいいのかと考えていて、自分から積極的に参加できる子はいいいのだが、自分が何をどう考えているのかを表に出せない子に手を挙げさせるのはなかなか難しいのではないかと考える。それは何故かという、人間は四種類に分けられるという話があり、ガンガン自分から前に出る営業マンタイプの人と、誰かのサポーターになるのが上手なタイプの人と、前には出ないけど頭を使って作戦とかを考えるのが得意なタイプの人、前に出て言われたことを正確にこなせるタイプの人がいると思っている。これらの人たちが一つのセットではないかと思っていて、自分がチームとして運営しているときも、やっぱり当てはまっていると思うので、参考にしているものである。それをここで当てはめて考えたときに、手を挙げられない人は自分がそれに参加して何になるかという発想にもたどり着かない人たちがこういうタイプの人たちに多いと思っている。そう考えたときに、その人たちに手を挙げさせることはやはり難しい。であれば、何か一つのものをつくり上げようというときは、企画することが得意な人と、県が育成してきた人たちとそうじゃない人たちを抱合せて行なうようなプログラムがあったらいいのではないかと考える。手を挙げる人たちではない人を、無理やりでもその人がいないと回らないというような態勢をつくってしまってお願ひしますと参加してもらおう。その中で、実際誘われて参加してみて、アイデアを出す以外でも、自分の力の生かしどころがあるということを実感できるような受け入れ態勢のプログラムを考えると、新しい形で参加した人が楽しめるのではないかと思うので、引っ張り込んでこられると考える。

◇委員

参考資料2のグラフに関して、思ったより自己肯定感が高いと感じた。子どもたちの本音がどこにあるのかと感じる。小学校や中学校へ顔を出すと、ポロっと子どものつぶやきみたいなものが聞こえてきたり、えっと思うことを耳にしたりしている。青森市で

は子どもたちを集めて子ども委員会を開催し、こういう意見が出されましたと報告があるが、それは全員の声ではないだろうと思っている。自己肯定感については、私も第1回から話しているが、少し気になっているのは自己肯定感とセットのように出てくるのが、子どものいいところを見つけてたくさん褒めてあげようという取組である。しかし、行き過ぎるとどうなるのかなと思うことがある。大人の褒め言葉のシャワーをたくさん浴びすぎると自己肯定感ではなく、優越感や「褒められたい！」と欲求にすり替わってしまうのではないかと、かつて子どもに関わる仕事をしていて思ったことがあった。やはり、その子どもが自分のことをどう思っているか、感じているか、どう評価しているのかに寄り添ってあげられる大人の心の余裕が必要だ。その子が自分で自分を認めて答えを出すことが自己肯定感だと思っている。心に余裕のある大人が、私自身の反省も含めて子どもたちの周りにどのくらいいるのか考えさせられることがある。子どもたちが自分のことをじっくりと考える時間がどんどん少なくなっているように思う。その時に寄り添う大人の心の余裕も無くなってきているような気がして、この場には直接関係のない話なのかも知れないのだが、日々思っていることを述べた。

◆会長

案件3について簡単にまとめておきたい。今日は若者を対象とした事業や取組を見ていただいた。皆さんから出た意見及び感想を一言でまとめてみると、県内で行われている取組については評価する声が基調だった。これは無駄だから止めろという意見は無かったと理解している。一方で、これらの取組の網に入っていない若者に対する目配りが必要ということが今日の議論の大きな流れだった。積極的に手を挙げられないような人たち、アルバイトや部活に多くの時間を取られているような子どもたちが、生き生きと青森で活躍できる場をつくるには、どういう取組があるのか。取組の方向性としては、家庭や職場など、受け入れ側に対するアプローチの必要性について提案があった。また、自ら手を挙げ積極的に活動できる若者たちが、裏方タイプの若者を巻き込んでいくしくみを作るべきだという提案もあった。この後、案件4で先進地調査の話があるのだが、いわゆるリーダー層ではない若者に対してのアプローチが上手くいっているところが候補先になるのではないかと。雑駁なまとめとなってしまったが、案件3に対してはこれで締めて、案件4の先進事例実地調査先について、事務局から説明をお願いしたい。

案件（4）先進事例実地調査先について

○事務局

（資料3に基づき説明）

◆会長

これに関しては、調査先等を今決めなければならないのか。

○事務局

今回議論いただいた中から事務局の方で調査候補先を選定したい。このことについて、会長と相談しながら視察候補先を考えていきたい。

◆会長

みなさんよろしいか。視察先の候補などについて提案があったら、私なり事務局の方へ連絡いただきたい。これで予定していた案件の全てを終了した。事務局へお返しする。

4 その他

○事務局

(資料4に基づき今後の予定を説明 次回第3回審議会は6月を目処に開催)